

日本民家園だより

vol.67

特集 川崎市伝統工芸館（日本民家園西門）

あいそ
藍染めを体験してみる

写真：鍮段絞りのゆかた

【伝統の色・庶民の色】

藍で布や糸を染める習慣はたいへん古いもので、古代エジプトですで行われていたとされています。日本では、飛鳥時代以前ごろに大陸からその技術が伝わりました。

近世になると、藍染めは木綿の普及とともに庶民へ伝わり、普段着やよそ行き、作業着など幅広く使われるようになりました。また、原料のアイは日本を代表する商品作物のひとつとして挙げられるほど、盛んに栽培されていたのです。

やがて明治時代になると、化学染料が普及しはじめます。すると、化学染料にくらべてたいへん手間のかかる藍染めは、しだいに行われなくなりました。

現在、わたしたちが目にする藍や紺色の布は、そのほとんどが化学染料で染められています。

天然の藍は、色移りしにくいことや洗って使いこむほど深まる味わい、地球にやさしいことなど、多くのメリットを再認識する動きも出てきています。このため、伝統的な天然の藍染めは、いつしか化学染料のものと区別して「本藍染め」と呼ばれるようになりました。

【藍染めのアイとは】

日本において藍染めに使用する液体染料の原料は、タデ科のアイ（タデアイ）と呼ばれる一年草の葉部分です。

その生産地としては、四国の徳島が知られています。吉野川下流域はタデアイの栽培にもっとも適しており、伝統的に品質のよいものが生産されてきたことから、藍のことを「阿波藍」とも呼びます。いっぽう、各地で栽培される藍を「地藍」と呼びます。

畑で育てられたアイの葉は、熟練の職人が何か月間もかけて「染」という染料に仕上げ、各地のムラにいる染め物屋に届けられました。

【藍染めの担い手—紺屋—】

染め物を業務とする染め物屋のことを、昔の人は「紺屋」と呼んでいました。紺屋は、農家の副業として営業するのが普通でしたが、近世に綿花の栽培が盛んになるにつれて藍染めの需要も増え、各地のムラにはつぎつぎと専門の紺屋が店を構えるようになりました。川崎市域でも、江戸時代から明治のはじめごろまでは、2～3つのムラにつき1軒ほどの割合で紺屋がありました。しかし、染めに不可欠な大量の水が汚染によって確保できなくなったり、化学繊維や化学染料の普及によって仕事が減るなど、いくつもの理由が重なり、現在ではほとんど見られなくなりました。

紺屋の仕事は、お客の注文をうけてはじまります。ひとくちに「染める」といっても、藍染めの工程は実に長く、手間のかかるものです。職人は染からつくった染液に布を浸けて干すという作業を繰り返します。布を干す作業が何

度も入りますから、仕上がりの日程は天候状況に左右されてしまいます。そのため、しばしばお客が待たされることから、「紺屋のあさって」ということわざができたほどです。

【染めた布のつかい方】

こうして時間と手間をかけて完成した藍染めの布はとても丈夫です。その上マムシや毒虫などが嫌うことから、仕事着や手拭いなどの普段着をはじめ、布団・のれんなどの道具にまで幅広く使われました。また、人びとは藍一色で染めた紺無地のほかにも、絞り染めや型染め、臍織などでさまざまな模様染めて、粋なおしゃれを楽しみました。

【伝統工芸館が伝える技術】

川崎市立日本民家園内にある川崎市伝統工芸館（以下：伝統工芸館）は、この消えゆく「本藍染め」の技術を継承し、かつ市民へ広く伝えてゆくことを目的として、昭和58年に開館しました。現在、藍染め体験の指導や定期的に行う体験講座の開催、作品展示を行っています。本来であれば数週間もかかる染めの工程ですが、ここではその一部を体験することができます。

【体験してみました！】

伝統工芸館では、実際にどのような体験ができるのでしょうか。藍染め体験ゼロの女性2名に同行して、絞り染め体験のようすをみることにしました。

● まずはデザインを考える

はじめての体験ということで、今回は手軽にできて時間もかからないハンカチの絞り染めに挑戦するお二人。絞り染めををすると言っても、使う道具はさまざま。

さっそく布と絞りの道具が目の前に置かれました。割り箸、輪ゴム、ビー玉、洗濯ばさみなど、どれもわたしたちの身近にあるものばかり。

—絞りって、糸以外にもこんないろいろな道具を使うんですか。それに、家にあるものが多いですね。

—そうですよ。ですから、お家でデザインを考えて絞ってくることもできます。

仕上がりを頭のなかで想像しながら絞る作業は、とても楽しいものです。体験者の2人も集中して机に向かっていました。

● 染めてみよう

いよいよ染めの体験です。深さ1m 20cmのアイガメには、深ミドリとも紺ともつかない、ふしぎな色の液体が縁まで入っています。この液体の中に、絞った布を静かにゆっくり浸してゆきます。

-この液、あったかーい！

と、体験者のひと言。じつは、藍の染液は20℃以下になると染まりづらくなるので、寒い時期はカメを暖めているのです。そして、布を浸けて揉むこと数分。



-そろそろ上げてみましょう。

の声で、ゆっくり布をカメから引き上げました。

-あれ？布がミドリ色だ。

藍染め製品の、あの紺色を想像していた体験者。ちょっとびっくりしていると、



-藍染めの青い色は、空気にふれてはじめて発色するんですよ。

と、スタッフ。そんな会話をしている間に、ミドリ色だった布が、みるみる鮮やかな紺色に！

● 仕上がりは大人でもワクワク

絞っていた道具を布からはずし、いよいよ完成です。無事に作品ができあがったお二人。さて、本日の体験はいかがでしたか？

- 今日かかった時間はぜんぶで1時間30分くらいだったけれど、内容が濃かったです。
- そうそう。それに、終わってすぐ作品を持ち帰れるし、楽しく気軽にできてよかった。
- 体験していて、「むかしの人ってこんなことやってたんだなー」ってなんとなく思いました。

〔伝統工芸館スタッフより〕

海や空の自然な色をみると癒されるように、天然の藍色もホッとさせる魅力があると思います。藍染めの体験は楽しく、仕上がった作品は手間をかけた分だけ愛着も湧きます。藍染めを体験したことのない方、布を持参して染めたい方など、どうぞお気軽にお越しください。

〔利用案内〕

● 開館時間

3～10月…9：30～17：00

11～2月…9：30～16：30

※体験希望の場合は15：00ごろまでに入館

● 休館日

毎週月曜日（祝日の場合開園）・祝日の翌日（土日の場合開園）・年末年始（12／28～1／3）

● お問い合わせ

TEL/FAX 044-900-1101

※事前予約で確実に染められます。

※グループ・学校団体の方はあらかじめご連絡ください。

● 染められるもの

・工芸館で用意している布を使う場合

ハンカチ…600円（体験含む）

バンダナ…800円（体験含む）

・布を持ち込む場合（予約制）

布の重量1gにつき15円

● 体験講座など

伝統工芸館では、より藍染めについて知識を深めていただくために、年に数回の講座を開催しています。また、前庭で栽培しているタデアイを利用して、夏場の一時期にはたたき染めや生葉染めの体験ができることもあります。詳しくはお問い合わせください。

● おすすめ見学コース

伝統工芸館は、日本民家園の3箇所の出入り口の1つ・西門にあたり、ここから日本民家園に入園できます。

- ・生田緑地西口方面から
専修大学・明治大学・東三田・三田方面からお越しの方は、伝統工芸館で藍染め体験をした後、吉民家を見学し、日本民家園の正門から出るコースがおすすめです。
- ・生田緑地東口方面から
小田急線向ヶ丘遊園駅・登戸駅・飯室バス停方面からお越しの方は、日本民家園正門から入園し、民家を見学した後、西口にある伝統工芸館で藍染め体験をするコースがおすすめです（ただし、途中で長い階段があります）。

2008 かわさき名産品に認定！（2008.4～）

- ・藍染め絞りハンカチ（伝統工芸館製）……………900円
- ・型染めテーブルセンター（伝統工芸館製）…1,200円

背景写真：伝統工芸館内・8つのアイガメ

絞り染め



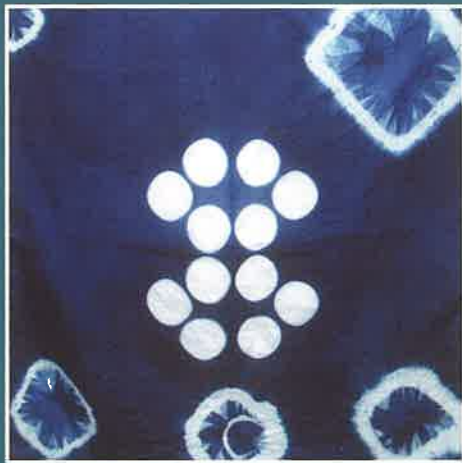
絞った布(1)



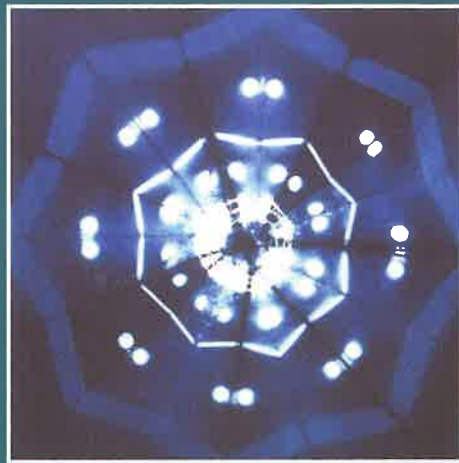
絞った布(2)



絞った布(3)



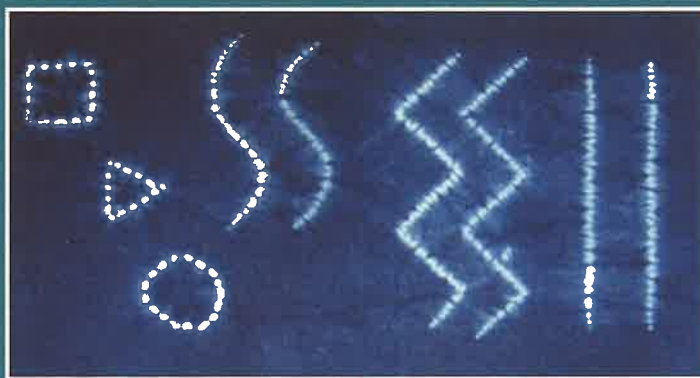
染め上がり(1)



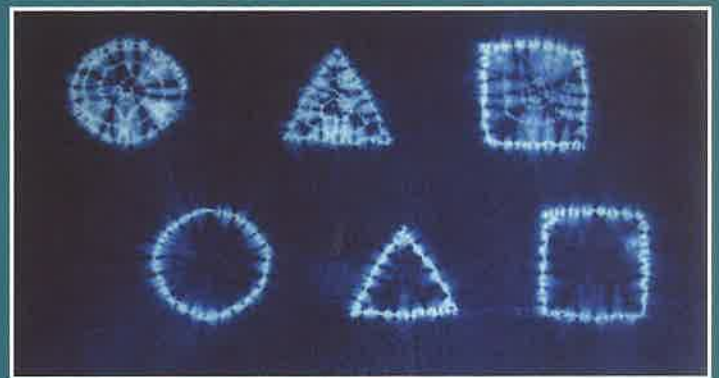
染め上がり(2)



染め上がり(3)



平縫い絞り (線の上を針目5mmくらいで縫い進め、最後に糸を引き締める。)



巻き上げ絞り (巻きが細かいと白が多く、間隔が広いと青が多い柄ができる。)

根巻き絞り (図柄を平縫いで縫い、きれいにほおずき状にして糸を引き締める。)

日本民家園だより vol.67 発行：平成20年3月20日

川崎市立日本民家園

<http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm>

〒214-0032 川崎市多摩区柞形 7-1-1 TEL 044(922)2181 FAX 044(934)8652 交通 小田急線「向ヶ丘遊園」駅南口下車徒歩13分

開園時間 (3~10月)午前9時30分~午後5時 (11~2月)午前9時30分~午後4時30分 (いずれも入場は閉園30分前まで)

休園日 毎週月曜(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土・日曜の場合は開園)、年末年始(12月28日~1月3日)